

22. 箱施用殺虫剤によるセジロウンカの防除効果の低下

1. 背景およびねらい

セジロウンカの防除には長期残効箱施用殺虫剤が一般的に使用されている。しかし、近年、イミダクロプリド感受性が低下したトビイロウンカが中国大陆より飛来していることが明らかとなっている。一方、セジロウンカによる被害は坪枯れのようなめだつ被害ではないため、セジロウンカに対する薬剤の効果は明らかとなっていない。そこで、これまでの殺虫剤効果試験をとりまとめ、今後のセジロウンカ防除法について検討する。

2. 成果の内容

- 1) フィプロニル粒剤の箱施用によるセジロウンカ虫数は、2005 年よりも 2006 年が高い密度で推移し、2006 年はセジロウンカ要防除水準（株あたり 10 頭）を超えた（図 1）。イミダクロプリド粒剤施用では、2005 年よりも 2006 年の方が株当たり虫数は高くなったが、要防除水準を越えることはなかった（図 1）。
- 2) フィプロニル粒剤施用では 1994 年、1997 年、2000 年にはセジロウンカ密度抑制効果は高かったが、2005 年、2006 年の移植 40 日後以降、対無処理比 50 以上となり、幼穂形成期以降無処理と同等の密度となった（図 2、3）。
- 3) イミダクロプリド粒剤は 1994 年、2000 年、2005 年ともセジロウンカ密度抑制効果が高かった。2006 年は穂ばらみ期までは対無処理比 50 以下で推移した（図 2、3）。
- 4) 以上の結果、セジロウンカの多発が見込まれる場合、フィプロニル粒剤では幼穂形成期に追加防除が必要と考えられた。イミダクロプリド粒剤については、セジロウンカ密度抑制効果を引き続きモニタリングしていく必要がある。

3. 普及上の留意点

長期残効型箱施薬剤の施用の有無にかかわらず、発生予察に基づいたセジロウンカの防除に心がける。

（生産環境研究部）

4. 具体的なデータ

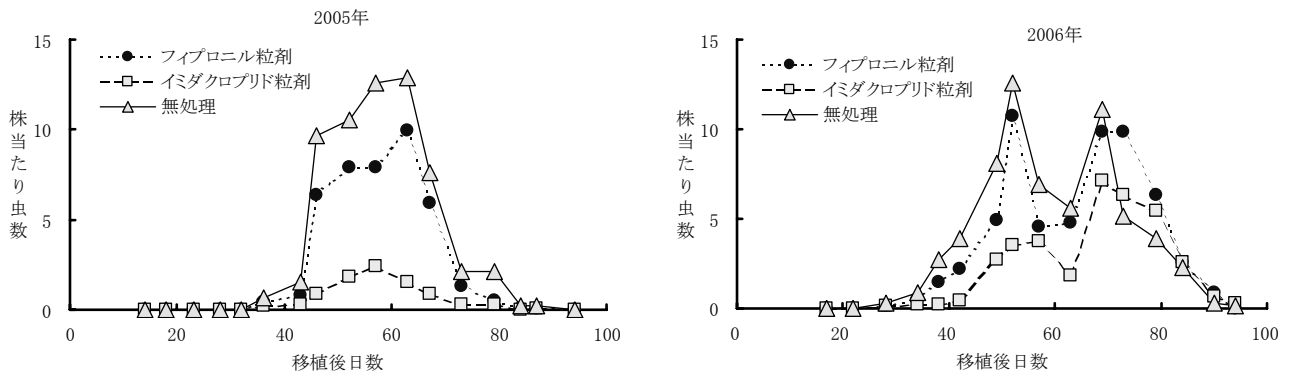


図1 イミダクロプリド粒剤およびフィプロニル粒剤の箱施用によるセジロウンカに対する密度抑制効果（東広島市）

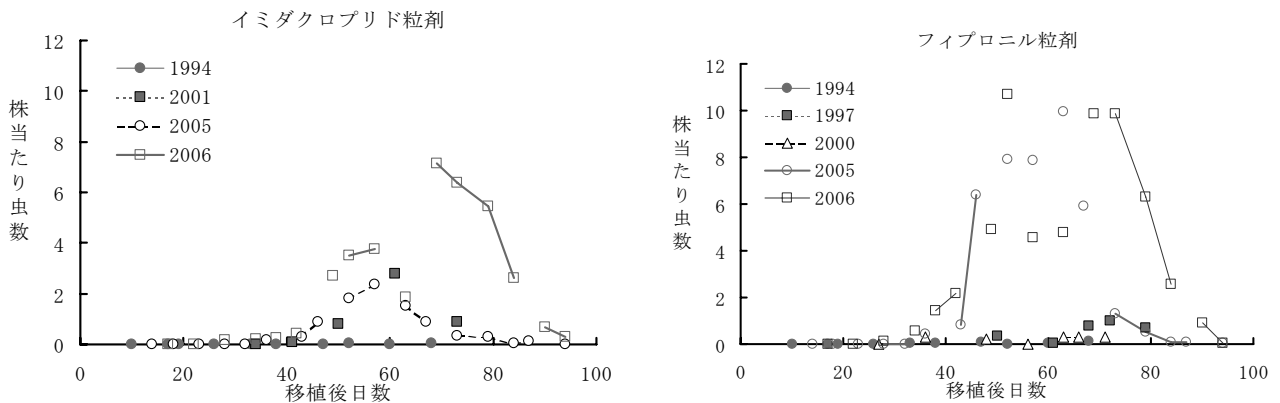


図2 イミダクロプリド粒剤およびフィプロニル粒剤の箱施用によるセジロウンカに対する効果（株当たり虫数）

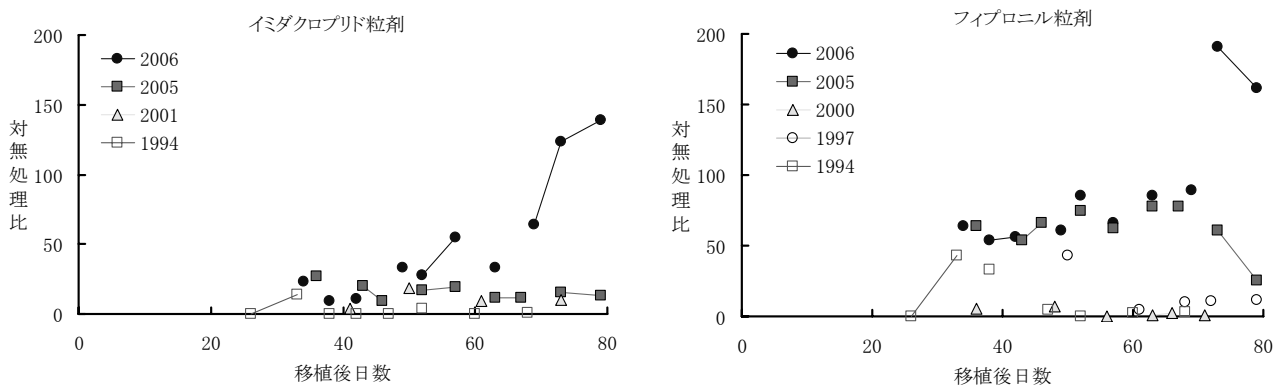


図3 イミダクロプリド粒剤およびフィプロニル粒剤の箱施用によるセジロウンカに対する効果（対無処理比）